



令和3年度の2年生が、産経新聞総合企画室の協力を得て制作しました。

近大附中 新聞

令和4年(2022)

3 | 31 [木]



近畿大学附属中学校

〒578-0944

大阪府東大阪市若江西新町5-3-1

06・6722・1261

オール近大で コロナ対策

近大が、新型コロナウイルスの対策として「オール近大」を進めている「新型コロナウイルス感染症対策支援プロジェクト」。2J2の外信部は、近大の社会連携推進センター長としてプロジェクトに携わっている伊藤哲夫さん取材した。私たちがでもできるコロナウイルス対策を聞く「最も大切なのは、マスクの着用、手洗いの励行、『3密』を避けること」と話してくれた。

伊藤さんは、さらに「バランスが取れた食事を取り、運動をして、しっかり休養すること」なども教えてくれた。プロジェクトは、医学部を持つ総合大学である近畿大学と、附属学校などの知見を生かして全学横断的に行われている。成果として、取材班がもっとも注目したのは、透明で表情が見えるプラスチックマウスシールド「近大マスク」だ。近畿大理工学部機械工学科の西敷和明教授らと、スケーター株式会社(奈良市)が開発した。お笑い番組で芸能人が使ったこともあり、話題となった。

また近大医学部放射線医学教室

の門前一准教授らの研究チームは、衛生面に優れ、女性一人でも1分以内で組み立てることができる「超軽量簡易ベッド」を開発した。

オール近大ということで、全教職員を対象に企画や提案を募集しており、近畿大の総力をあげたプロジェクトだからと、次々と新しいものが開発されていると思っ

た。伊藤さんは、原子力研究所に勤務し、ほかに東日本大震災復興支援室長も兼務している。社会連携推進センター長としての仕事のやりがいを聞くと、「大学のいろいろな先生に会えること」だと答えた。

私たちの質問への答えだけでなく、さらに詳しい内容を、ていねいに優しく話してくれた伊藤さん。取材にあたったメンバーの中から「今回は伊藤さんに頼りきりの取材になってしまったので、次に取材する機会があれば、もっといい記者になって取材したい」との声もあがった。(高山颯太、岡田菜央、佐伯七音、佐藤智大、高畑司、中山咲良、松田俊博)

コロナウイルス対策について取材を受けた近大の伊藤哲夫・社会連携推進センター長(左端)



透明マスク・超軽量簡易ベッド

勉強好き嫌い作らず 興味持ったこと挑戦

2J1社会部は昨年12月、近畿大学の「オール近大新型コロナウイルス感染症対策支援プロジェクト」に参加している理工学部の越智洋司准教授と谷口義明准教授に取材した。2人は、学生に向けて「小、中学校の勉強は将来の土台になります。だから学問に好き嫌いをつけないほうがいい。そして、興味を持ったことにチャレンジしてください」とアドバイスしてくれた。

研究内容は、ブルートウスの信号を利用して密状態を計測し、新型コロナウイルス感染症の予防対策に生かすというもの。2人は理工学部に所属し、もともと無線通信などを研究していた。大学として、困っている人を助けるの



近大附中生に「学問に好き嫌いをつくらず、チャレンジして」とアドバイスした近大理工学部の谷口義明准教授(左から4人目)と越智洋司准教授(同5人目)

コロナ対策プロジェクト 教授らに聞く

が大学の役目であり、コンピュータを使って貢献できないかと考えた。小さい頃から将来は科学者や先生になりたいと思っていたという越智准教授と、パソコン関係の仕事に就きたいと思っていたという谷口准教授。2人とも就きたい仕事についているが、「気がついたら夢がかなっていた」という。

そこで、学生に対してアドバイスをしてもらった。越智准教授は「好き嫌いせずに多くのことに挑戦し、逃げないでいる。また目標があるなら、小学生や中学生のときから、達成するために準備をしておく」と話してくれた。

また谷口准教授は「興味のあることチャレンジしてみたり、好きなことをしたりしてみたい」とアドバイスしてくれた。

近畿大学のよい点を聞くと、越智准教授は「チャレンジする雰囲気があり、さまざまな分野の先生と接することができる点」、谷口先生は「教員の裁量が大きく、また学生を含め、大学に元気がある点」だと、それぞれ答えた。

取材して、社会部のメンバーは、自分の将来をより良いものにするために苦手なことも得意に、好きに変えられるようにたくさんの方に挑戦してみようと思った。(大海拓豊、岡本凌、川原沙也、張本陽菜、福井瑞生、村上優人)